

小説・江戸神仏歳時記 (16)

山王日枝神社



郡 順 史

赤坂見付から新橋駅方面に向かって少し歩いて行くと、左側に小高い森がある。山王日枝神社である。

山王日枝神社は、とに角歴史が古い。

源頼朝の重臣であった江戸重長が、江戸に居を構えた時（一二〇〇頃）、領地の鎮守として比叡山の登り口にあった山王祠を勧請し祀り、その後大田道灌が江戸城を築く際に更に大きくし、武蔵開拓祖神並に関東総鎮守社として祀り尊崇した。天明十年（一四七八）の事と伝えられている。

更にその後、天正十八年（一六五七）徳川家康が江戸に幕府を開くに当って、城内にあった宮社（みやしろ）を現在の地へ移し、これまた篤く崇敬し、鎮守、産土神として幕府直轄、神領五百石という当時としては破格の保護を加えたのであった。

その当時から江戸時代を通じて、日枝神社は、山王権現、日吉山王大権現とおよびし、一般の江戸ッ子は「山王さん」と親しみをこめて呼んでいた。

現在の社稱になったのは、明治になってあらゆる神社があらためられたため、当社も南祭神を大山昨神（おおよまくひのかみ）、相殿を國常立神（くのこのこたちのかみ）、伊弉冉神（いざなみのかみ）、

足伸彦尊（たらしなかつひこのみこと）となった由。

江戸時代、この神社のお祭りを、神田明神と共に天下祭りと呼び、江戸ッ子の自慢の種になっているが、そのいわれは、この神社のお祭りの時、その盛んなさまに家康が興味をしめし、

「城内に入れよ」

と指示し、わっしょいわっしょいと賑かに、そして威勢よく、まだ築城半ばだった江戸城に繰り込んで、城完成と天下城の多幸を祝福したのが氣に入られ、以降慣例となって歴代の將軍が見物するのが習となったからであるという。ちなみに神田明神の御輿が城入りしたのはその翌年と言われているが、ともあれこの二社の祭りは、以来六十余州広しといえど、祭りに「天下」が付くのはこの二社以外には無い。江戸ッ子が自慢にするのは当然であろう。

だがここに面白いデータがある。それは、では現在の江戸ッ子、つまり東京ッ子に、山王日枝神社はどれほどの知名度が有るか、ということである。

すると、四十五歳以上のほぼ80%が、「ああ赤坂にある神社ですね」と正確に知っているが、四十代以降、十代二十代の男女に至ると、逆に30%の人が知らなかった、と言う。これにくらべ、神田明神は？とさきくと老若男女あわせて半数以上

の人が名だけは知っていた。が、それだけで正確な在否は答えられなかった、と。

これはどういう事なのか。調査分析した人によると、1に「神仏に対する崇敬度の衰え、従って記憶しない」2に「昔の如くお祭りに余り関心を持たなくなつた」3に「なんらかの関係、関心が無ければ行つても仕方ない。それよりもっと面白い処がある」10代20代では「神社や寺詣りをすると、友人に古くさいと嗤われる、だから行かない」といった具合だそう。ましてや「あの神社、お寺さんへお参りすると、かくかくのご利益を頂戴出来る」と告げると、答えは「ほおー」ではなくて「ふーん」だそうである。

しかしこうなつてしまつたのは、日本人にとつて由由しい問題ではなからうか。

日本人は昔から信心深く、神仏を尊崇する民族との定説があつた。事実、昭和の前半の時代までは、そういう人が大勢いた。それが昭和の後半時代から、「あんなのは迷信だ」と鼻先で嗤つて尊崇しなくなつた。

我々の先輩たちの家へ行くと、ほとんどの家に神棚と仏壇は有つたものだ。それが現在には有るほうが珍しくなつてしまつた。

これは先人が、「心に信のない者は、人間として一段、欠落している人である」という言葉を教えてくれているが、正に現代人は、心を崩壊させ、

あらゆるものに「信」を喪失させてしまったのではなからうか。これはまこと、民族にとつての一大事であると思うが、如何であらう。

さてではご利益であるが、この神社に限らず、いずれの神社仏寺においても、あからさまにご利益を言いたるのを厭う傾向がある。「神さまのご利益は人間生活全般であつて、個々一つ一つではない」という趣意からであらうが、しかし一般庶民にとつては、「病氣が治る」「商売がうまく行く」「××大学に合格できる」などという身に迫つたものが大事で、そのことをお願いしお守りしかなくては下さるのが信仰であつたりするのだ。俗に言う「現世利益」である。

二

日枝神社の御祭神・大山咋神さまの御利益は、地主神として山・水を司り、大地を支配し、万物の成長発展、産業万般の生成化育を守護し給う。とあるが、これは明治維新の神仏分離によつての御利益であり、その以前の徳川時代は江戸郷の守護神ともう少し具体的且つ庶民の身近なご利益を庶民にわかりやすくもたらしたようだ。

その一つ二つを、巷間の伝承をまじえて述べる
と、まずはその鳥居にある。

先に記した如く、日枝神社は赤坂の旧溜池の附

近の小高い丘の上にある。近年、参詣者の足をおもんばかりで、三つある参詣道の赤坂面には二段三段のエスカレーターがある。

これも珍しいが、そのエスカレーターを登つて行くと、壮大な鳥居の前に出る。この鳥居は俗に山王鳥居と言われ、鳥居の上に更に三角形の小さな屋根のような物が乗つている。

これは山王鳥居とよばれ、大津の日吉大社のものと同じとされ、この鳥居の上の黒い屋根風ものを、両掌を合わせじーっと見詰めると眼が良くなる、と江戸庶民は信じ合ひ、参拝の行き戻りにそうした姿をよく見たという。むろん現在でも信じ、そうする人が多いのではなからうか。

次に「神猿」である。

神門の両脇に随神像と神猿像がある。その門をくぐつて社殿にすすむと、石造りの神猿像が左脇に安置されている。しかも夫婦の神猿で女猿は乳飲み子を胸にしっかり抱いているのである。

猿は日枝神社の神使されているのと、子持ち夫婦猿といふところから、この猿像に祈願すると、夫婦円満、商売繁昌、更には婦人にとつては安産や子宝にめぐまれ、赤子の無事成長がかなえられるという。

これについてこんな話が語り伝えられている。
宝曆の頃(一七五〇年代・九代家重將軍)すぐ近所の青山に佐吉といぬという夫婦が住んでいた。

佐吉は二十八歳で野菜のボテふりを生活（なりわい）としていた。いねは二十一歳で一年前に男の子を産んだばかりであった。

佐吉は酒はそう飲むほうではなかったが、無類のバクチ好きであった。そのため折角稼いだ金も家に入れてくれず、母子はろくすっぽ食べられない。いねが食べられないのは我慢できても、乳の出が悪くて赤ん坊にまで餓えて泣かせるのが彼女には辛かった。

そのため時々夫婦は口喧嘩をした。だが、佐吉のバクチ好きは治らなかつた。

そんなとき、いねは山王権現さんのご神猿の噂を耳にした。

噂を伝えてくれたのは、長屋の大家のおかみさんのやえであった。やえは「神猿の話をしてから、「あんたも山王さんのお猿さんにおすがりしてみたらどう。ただ毎日、手を合わせて拜（おが）めばいいのだし、近所だし、このまま我慢していたら辰ちゃん（赤ん坊の名）は餓から病氣になつて死んじゃうよ。そしてそれが元で夫婦別れる事になるかもしれない」

おどかし半分にすすめられ、いねもそうだと頷き、その日から山王さんへ赤ん坊を背負つてお詣りするようになった。

五日、十日、二十日と、兩だの雪の日、風の強い日は赤ん坊に悪いので中止し、そのほかの日は

毎日通い、石の猿の前に膝まづき両掌あわせて必死の思いをこめて祈願した。

一と月ほど経った或る日、夕景手ぶらで帰つて来た佐吉は、いきなり懐のカラの巾着をとり出すと、

「畜生！もう金輪際バクチなんか打つもんか！バカ野郎！」

と怒鳴り、「めしだ！めしだ！食わせてくれ！」とわめき、大の字になつてしまつた。

ご飯を食べさせながら事情を訊くと、よく判らないが、胴元というのがイカサマをやり、佐吉たち素人の銭を巻き上げていたのだと。賭け客の一人が発見し、文句を言うと胴元たちは刀を抜き、味方をした佐吉たちまで斬ろうとして大さわぎになり、佐吉は命からがら逃げて来たという。

やえにとつては亭主がバクチをやめてくれたのは嬉しい。けどバクチをやめたが、その代り今度は酒を呑むようになって酒好きになつても困ると内心はらはらしていたが、それも山王さんの神猿のおかげ（やえはそうだと堅く信じたようだ）と、いよいよ山王さんを信仰し、時間あるとお詣りし、神猿に手を合わせたという。

いや、それだけでなくやえは、こんな有難いご利益を一人占めにするのは申し訳ないと、知り人すべてに、山王さんのご利益を語りまくつたという伝説が、今でも氏子たちのあいだで語り伝えら

れているのである。

三

ご利益の伝説はともあれ、山王神社と神田明神の祭りは、文字通り江戸ッ子の意地と面目をかけたの、それこそ天下を二分するほどのものだったという。

ここでちよつと問題になるのは、どういう人間が、そもそも「江戸ッ子」とよばれるべきなのか、であろう。

俗に「芝で生まれて神田で育ち」と唄にあるのがそうだ、という事になっているが、両者の住民は、生まれ育ったのが山王さんか神田の明神さんの神域の中でなければならぬ、つまり両社の氏子でなければ「江戸ッ子」とはいわれぬ、と言い、更にきびしく言うと、それも三代続いた、つまり祖父母、父母そして本人が氏子でなければ、とも言う。

だが、両社の神域（氏子の住居の在る所）が、芝、麴町、神田その他數十ヶ町と広いことは広いが、三代続いて同域に住居するというのは、おそらく二十%とはおらないのではないか。それほど江戸は人の出入りが繁しかったのだ。それゆえ時代がすすむにつれ、三代続きのほうは資格としてあまりやかましく言われなくなった。

これらの氏子たちが、山王さんは六月十五日（現在六月中）の夏祭り、神田明神さんは九月十五日（現五月中）の秋祭りに、各町内氏子連でつくった神輿や山車を何十台と繰り出して、掛け声も勇ましくねりにねったのだから、その華やかさ、勇壮さは正に見ものであった。

それに加えるに、神宮や氏子代表が、古式にのつとつた衣装をまといねり歩くので、あたかも一幅の時代絵巻を見るようである、と江戸古記に書かれている。

しかし昭和平成に至って、奉納の野村万之丞の大田楽（だいでんがく）も好評をよび、平成五年には文化庁芸術祭賞を受賞している。

これも時代の推移というものであろう。

最後になってしまったが、山王日枝神社さんを語るのに、どうしても忘れてはならない事が二つある。

その一つは、山王さんの在の高台を、その昔は「星が岡」と呼んでいた事である。

ここからの眺めは、神田明神さんのように庶民の家々は見られないが（眼下に大名旗本の屋敷が多かった）、江戸湾がすぐ近く、手をのばせば白帆の舟が掴めそうな風光明媚さを与えてくれ、眼を愉しませてくれる。更に眼を転ずれば東海道を上り下りする旅人も見え、声をかければ振りかえるほど（ちよつと大げさ）である。

景色だけではない。ここには有名な「星の寮」という茶店ふうの飲茶や料理をまかなつてくれる店があった。

この寮であつたかどうかは記憶していないが、昭和の二十年代のはじめ頃、この茶屋の一室で、作家の土師清二先生や山手樹一郎先生、村上元三先生など長谷川伸先生の入門の方々が、月に一度お集まりになつて俳句の勉強会をやつておられ、そこへ小説の原稿をいただきに何度か行つたことがある。むろん玄関先で原稿をいただくだけであつたが、行くたびに「ほくもこういう処で小説や俳句の勉強をしたい」と思つたものだった。それほどに此処は静かで落着いた雰囲気だったのだ。さておしまいに、もう一つロマンチックな噂をつけ加えよう。

この神社さんにも、神田明神さんと同様に、参詣するのに男坂と女坂とがある。距離的には明神さんのより少々険しく長いような氣もするが、とにかく男性は男坂を、そして女性は女坂を登つて、拝殿の前で出会うと、その男女はめでたく結ばれる、と言うのである。

もつとも全然みず知らずの男女が、偶然に拝殿の前で出会つたところで恋愛が成立したら、めでたいどころかちよつとこわくて問題になるだらうが、さりとて知り合つた仲なら、わざわざ打ち合わせて別々に登つてぱつたり顔を合わせるのも、

何となくわざとらしくていやらしい感じがする。

だが、この噂、まるつきり作り事ではないようだ。と言うのは、筆者の友人の話だが、その友人の若い夫婦が、まだ結婚三年目だというのに、つまらない意見の相違で離婚のピンチに陥ち入つた。そこで友人が、その若夫婦に、「だまされたと思つて男坂、女坂を別々に登つて拝殿の前で出会つてごらん」とすすめた。

若夫婦は、文字通りだまされた氣持で、実行した。ところが拝殿の前で神さまを拝み、拝み終つて顔を見合せて、寸前までそんな氣がないのに、二人とも同時ににっこりと笑い合つたという。そして戻りは、手をつなぎあつて女坂を降りて帰宅した、と。

これを以てご利益の一つ、と言うのは浅薄のそしりは免れまいが、しかし頭から嘘だ迷信だとバカにするより、信をおいたほうが倅というものはなかるうか。

—— 次回の予定は不忍池弁天堂 ——

■訂正とお詫び

酒林第七十四号に誤植がありました。
左記の通り正誤表を記載させて頂きます。

誤	正
二十五頁二段九行目 デンマークの首都ストツ クホルム	デンマークの首都コペン ハーゲン

■高松張子(表紙説明)

高松藩初代藩主松平頼重公が高松にご入封の際、
家臣が製法を伝えたという「高松張り子」は、
素朴な紙の玩具として、また身近な信仰の対象
として親しまれている。

■乃村七重(のむらななえ)プロフィール

- 一九四八年
- 高松市八坂町生まれ
- 一九九九年
- 「高松張り子」が香川県の伝統工芸品に指定
され、同時に個人としても伝統工芸士として
の認定を受ける。

香川県高松市八坂町三の四

TEL・FAX／〇八七―八二一―八四四二

「酒林」随筆特集 第七十五号
平成二十年三月一日号
発行人 西野信也
印刷人 株式会社 太陽社
発行所 高松市亀井町二番地八
西野金陵株式会社

万一乱丁・落丁がありましたら、ご一報下さい。